

いしかわ ゆきのり  
石川 幸徳

## 年賀状のつぶやき

●日本郵政グループ労働組合  
(JP労組)・書記長

### はじめに

例年のことだが、「新年明けましておめでとうございます」「謹賀新年」「賀正」といったあいさつ文で始まる私（官製のお年玉付き年賀はがき）を手に取り、新年の幕開けを実感される方も多と思う。しかし、昨今は年末のカントダウンと同時にメールで年頭のあいさつをする人が増えている。また、この数年はスマホの普及に伴い、TwitterやLINEといったSNSを活用したオリジナル画像を住所がわからない相手にも簡単に送ることができることから、私を使ってくれる人は年々減少している。今の潮流からすると、私が消えてなくなる日も遠くない気がするので、私が皆さまに認知されているうちにこれまで皆さまのお役に立ってきた記憶を少しだけ記しておきたい。

### 「年賀はがき」の歴史

私が生まれたのは、1949（昭和24）年である。それ以前は、通常の官製はがきが年賀状として使われていたと聞く。私の誕生を機に、年賀状の取扱量は大きく伸び1955（昭和30）年には戦前のピーク時を超えた。

ちなみに、第1回のお年玉付き年賀はがきの特等賞品はミシンであった。当選賞品は、その時代の世相を表しており1956（昭和31）年は電気洗濯機、1960（昭和35）年はフォームラバーマットレス、1965（昭和40）年以降はポータブルテレビや8ミリ撮影機・映写機セット、1984（昭和59）年は

電子レンジ、1986（昭和61）年はビデオテープレコーダーと、その時代の流行りに合わせ変遷を辿った。

なお、2013（平成25）年に現金（1万円）が登場し、2015（平成27）年には現金10万円（またはセレクトギフト）となったが、当選確率は「10万本に1本」から「100万本に1本」と当選は奇跡的なものとなった。

### 年賀状文化の衰退

私の発行枚数の推移は、1949年が1億8,000万枚。以後、日本の経済復興や人口の増加に伴い1964年には10億枚、1973年には20億枚、1983年には30億枚、1995年には40億枚を超え、うなぎ登りの様相で我が国の郵便事業を支えてきた。しかし、2003年の44億5,936万枚をピークに、その勢いは衰え多少の起伏を見せながらも漸減してきた。この8年間は、連続で前年比を下回り、昨年の当初発行枚数は25億8,600万枚にまで減少し、42年前（1976年）の水準にまで落ちた。

### 私の存在意義はなくなったのか

「去年の十一月ごろ年賀状をかくれんしゅうをしました。はがきのおおきさにきったかみにかくれんしゅうをしました。ちいさくかかないといけないのでむずかしかったです。とくに自分の住所のところがかきにくかったです。なんどもかきなおしました。生まれてはじめて年賀状をかきました。十枚のはがきをわゴムでとめてポストに入れたとき、バサ



ッとおとがしました。そのおとと、ともにこれをつくのかなというふあんと、はじめて人にだすうれしきで、ふくぎつなきもちでした。年賀状をだした先生からへんじをもらいました。私のだしたはがきがついたのがわかってうれしかった。字をかけることはすばらしいことだとおもいました。だって自分のおもっていることを、しろいかみにうつすことができるんですもの。」(原文のまま掲載)

これは、家庭の事情で小学校にも通うことができなかつた人が大人になってから夜間中学に通い鉛筆の持ち方から学び始め、生まれて初めて年賀状を書いた時のことを綴った作文の一節である。この年賀状を受け取った先生は、自分が教えてきたことが実を結んだ嬉しさと、教え子が一文字一文字一生懸命書いたことが伝わる年賀状を受け取り感動の新年を迎えたと思うと、私は時代遅れの存在になったかもしれないが存在価値がなくなったとまでは言えない気がする。

もう一つ、私に関連した忘れてはならない歴史があったことも記しておきたい。時は、1940(昭和15)年。この年を境に、年賀郵便の特別取扱が中断されたのである。翌1941(昭和16)年の太平洋戦争突入以降は、私の生みの親である逓信省自らが「お互に年賀状はよませう」と自肅を呼びかけるポスターを街に掲げたのである。その後、年賀郵便の特別取扱が再開されるのは、世の中にもようやく復興ムードが漂い、人々にも年賀の気持ちを持つゆとりも出てきた1948(昭和

23)年のことであった。戦時中に年賀状が消えたことは、年賀状が平和の象徴であることの証でもあり、大切に受け継いでいくべき文化でもあった。

#### おわりに

私がすすくと成長してこられた背景には、人口の増加や経済の成長はもとより、「プリントゴッコ」など家庭でも簡単に大量の年賀状を作成することを可能にした機器類の普及や、ワープロからパソコンへのIT技術の進化に伴い写真入りなどオリジナリティーあふれる年賀状を作る楽しみが加わったことも大きい。

しかし、皮肉にも大量の年賀状作成が容易になったと同時に、手書きは減り機械文字では「味わい」や「心」が伝わりにくくなってしまったように思う。もちろん、字が下手で手書きしないですむから出すという人もいるかもしれないが、字のうまい下手に関係なく手書きにはその人の心を伝える不思議な力があるように思う。

さらには、個人情報管理が厳しく規制される時代となり、年賀状を出したくても住所を調べるのが一苦勞というケースが増えてきた。こうした時代の変化に伴って私が減少していくことに抗うことは難しい。しかし、心を届けるためになくすことのできない手段であると信じたい。